

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

現代アメリカ文学研究

ドス・パソス、メイラー、フット、フォークナー(後編)

A Study of Modern American Literature:

Dos Passos, Mailer, Foote, Faulkner (Latter Part)

依藤道夫 竹島達也 古屋 功 大木 愛

YORIFUJI Michio , TAKESHIMA Tatsuya , FURUYA Isao and OKI Ai

目次

【前 編】

英文サマリー

序文

第1章 ピカソとドス・パソス

『マンハッタン乗換駅』におけるキュービズムの意味

第2章 戦場における民主主義とは

『裸者と死者』のハーン少尉とカミングス將軍

【後 編】

第3章 アメリカ南部の戯曲

ウィリアムズ後の新たな伝統について

第4章 「エミリーのバラ」再考

フォークナーの求めたもの

結語

参考文献

第3章

アメリカ南部の戯曲

- ウィリアムズ後の新たな伝統について -

アメリカの「内なる異国」とも言え、独自の特異性を帯びたアメリカ合衆国南部⁽¹⁾を舞台に、そこに暮らす人々の生き様を題材にした「アメリカ南部の戯曲」⁽²⁾は20世紀に入ると、幾多の南部人劇作家の登場により、内容的に非常に充実したものになり、数々の注目に値する作品が生まれた。

ポールグリーン (Paul Green, 1894-1981) は『アブラハムのふところに』(*In Abraham's Bosom*, 1926) で、人種の平等を求める黒人を決して許さない、非常に暴力的で、狂気に満ちた南部白人社会を、そして、『コネリーの家』(*The House of Connelly*, 1931) では、黒人奴隷や白人の貧農の搾取によって繁栄してきた旧南部貴族階級の道徳的腐敗や墮落を描いた。

リリアン・ヘルマン、(Lillian Hellman, 1905-84) は、『小狐たち』(*The Little Foxes*, 1939) やその前編にあたる『森の別の場所』(*Another Part of the Forest*, 1946) で、南北戦争後の変貌する南部社会を舞台に、物欲に支配されたために同じ一族の中で争いの絶えない、欺瞞に満ちた新興中産階級の醜悪な有様を糾弾した。

テネシー・ウィリアムズ、(Tennessee Williams, 1911-1983) は、『欲望という名の電車』(*A Streetcar Named Desire*, 1947) で、大農場を経営する貴族階級に属していたが、一族の没落や同性愛が発覚した夫の自殺により、精神的に疲弊し、更には妹の夫にレイプまでされ、廃人と化してしまう南部女性の悲劇的運命を描いた。また、『地獄のオルフェウス』(*Orpheus Descending*, 1957) では、非常に偏狭な南部の小さな田舎町に、破天荒な若者がやって来て騒動を巻き起こすが、町の人々からリンチに遭い、抹殺されてしまう。

このように見てくるとわかるように、20世紀の初頭から中頃までの、つまり、グリーンやヘルマンやウィリアムズといった旧世代に属する南部の劇作家の戯曲には、アメリカ南部の恥部を深く抉り、白日に晒すような作品が多く、それが「アメリカ南部の戯曲」の一つの大きな伝統になっているとも言える位なのである。

本稿では、南部の劇作家で、新世代に属する劇作家の作品に見られる「アメリカ南部の戯曲」の伝統が、どのように継承され、あるいは変化・変質していったかを考察する。それによって、「アメリカ南部の戯曲」の特質に関する総合的理解を目指してゆきたい。

⁽¹⁾ 南部の地理的な領域については、本稿では、南北戦争当時のアメリカ南部連合に属していた11州 (アラバマ、アーカンソー、フロリダ、ジョージア、ルイジアナ、ミシシッピ、ノースカロライナ、サウスカロライナ、テネシー、テキサス、ヴァージニア州) にケンタッキー、ミズーリ、メリーランド、デラウェア州を加える範囲とした。

⁽²⁾ 本稿で扱う南部の戯曲の定義に関しては、以下の Charles Watson の定義に従った。

I use the phrase "southern drama" to mean drama that combines southern authorship and subject matter. Charles S. Watson, *The History of SOUTHERN DRAMA*, (The University Press of Kentucky, 1997) p. 2.

農本主義 (Agrarianism) 的傾向の拡大

グリーンの『コネリーの家』では、新興勢力である貧農の娘が、没落した旧貴族階級の後継者である若者に、農家を捨て街に出ることをたしなめ、若者への愛は土地を所有しているためであると平気で主張し、何よりも土地の重要性を力説し、土地に固執する。

また、ウィリアムズの『ガラスの動物園』(*The Glass Menagerie*, 1945) では、セント・ルイスの狭いアパートで暮らす一家の女家長であるアマンド (Amanda) が、若い頃、ブルー・マウンテンのプランテーションで多くの青年紳士を迎えたことを、ハナミズキや黄水仙の咲き乱れる、春のミシシッピー・デルタの美しい光景と共に懐かしく思い出す。

このような考え方は、自然や土地や共同社会を代表とする、南部農業社会の持つ伝統的な価値を高く評価した「農本主義」("Agrarianism")⁽³⁾ の思想に多くの点で通底していると思ふことができる。そして、農本主義的傾向は、新世代の南部劇作家の作品の中にも引き続き指摘することができ、「アメリカ南部の戯曲」の伝統の重要な部分を形成しているのである。

ロバート・ハーリング (Robert Harling) の『マグノリアの花たち』(*Steel Magnolias*, 1987) は、ルイジアナ州の小さな町の美容院が舞台となり、そこに集まる女性達が共に泣いたり笑ったりしながら、互いに助け合って生きてゆく "regional comedy"⁽⁴⁾ である。マグノリアの花は、ルイジアナ州やミシシッピー州の州花であるが、タイトルとなっているマグノリアは、登場人物である、人生における様々な苦難にも決して負けずに前進してゆく力強い女性達のことも表しているのは明らかである。また、マグノリアの花は、アメリカの南部を代表する花の 1 つなので、もっと普遍化した形で南部の女性達一般の人生も表していると考えられる。

中心的な登場人物の 1 人であるシェルビー (Shelby) が最も好み、結婚式で着るドレスの色は、ピンクで、そのピンクは、結婚パーティーを行う自宅の庭に咲き誇るつつじの色であることが強調されている。その庭には、マグノリアの巨木があり、花を咲かせており、またシダ類なども豊富にあることがわかる。『マグノリアの花たち』は、タイトルばかりか作品の各所に、南部の豊かな自然を想起させるイメージが散りばめられ、作品全体の雰囲気にも農本主義的要素が濃厚だと考えることができるのである。

アルフレッド・ユーリー (Alfred Uhry, 1936 -) の『ドライビング・ミス・デイジー』(*Driving Miss Daisy*, 1987) では、ジョージア州、アトランタ郊外の、自然が豊かで、樹木や草花の非常に美しい高級住宅地に、主人公のユダヤ人の老婆デイジー (Daisy) の邸宅がある。ユーリーは、デイジーが生活する地域の自然の豊かさを、庭の花壇や鳥のさえずり、南部でよく見られるつつじの花、アトランタ特産の桃の実といった形で、作品の随所に実に巧みに織り込んでいっているのである。

⁽³⁾ 農本主義は、アレン・テイト (Allen Tate, 1899 - 1979) やロバート・ウォレン (Robert Warren, 1905 -) 等を中心とする、テネシー州ヴァンダービルト大学英文学科を基盤にした「アグレイリアン」("Agrarians") が、1930年に発表した論文集、『私の立場』(*I'll Take My Stand*, 1930) で唱えた考え方である。

⁽⁴⁾ Clive Barnes, "Humor & hair spray," *New York Post* (March 24, 1987) in Joan Blake, ed., *New York Theatre Critics' Reviews 1987*, p.200.

そして、こういった農本主義的傾向が、作品の中で非常に重要な働きをし、作品の本質にも大きくかかわっている戯曲が、新世代の南部劇作家の中心的存在であるホートン・フット (Horton Foote, 1916 -) の『バウンティフルへの旅』(*The Trip to Bountiful*, 1953) であろう。

テキサス州の大都会ヒューストンの狭いアパートに、主人公の、年をとり心臓の悪い未亡人ワッツ夫人 (Mrs. Watts) は、息子と嫁と三人で暮らしている。息子のルーディー (Ludie) は、病気で会社を長期間休んでいたこともあり、出世もできず薄給で、嫁のジェシー・メイ (Jessie Mae) は、ワッツ夫人の年金をあてにする仕末である。ジェシー・メイは、すぐに激昂する感情的な性格をしており、ワッツ夫人に対しても何か不満なことがあると口汚く罵り、この家族には争いが絶えない。また、ワッツ夫人にとって、大都会ヒューストンは、増え続ける車とその騒音が充満し、交通事故も頻発する、夜も落ち着いて寝られない、醜悪で、絶望的な仮の住まいでしかないのである。

ワッツ夫人は、テキサス州の、ヒューストンとは対照的な、自然の豊かな田舎町バウンティフル (Bountiful) の出身で、家族の者に見つからなければ、今でも一人で生まれ故郷に帰りたいという願望を強く持ち続けている。『バウンティフルへの旅』は口うるさい嫁と喧騒に満ちた都会生活ですっかり自分らしさを失ってしまったワッツ夫人が、都会を離れ、バウンティフルに再び戻り、人間的な豊かさを取り戻そうとする話であり、タイトルにもその意味が込められているのである。

ワッツ夫人は、ほんの束の間バウンティフルに戻ることができたが、そこには住む人もなく、最後に残って土地を耕し続けた彼女の親友も亡くなり、町は廃虚同然となっていた。第二次世界大戦後の、経済的な豊かさや繁栄を享受したアメリカでは、モータライゼーションが進行し、幹線道路の建設が、全国的な規模で行われた。そういった道路に沿って、マクドナルドのようなファースト・フード・レストラン、ホリデイ・インのようなモーター、レヴィット・タウンのような簡易住宅が次々に建設され、あらゆる面での能率や効率が執拗なまでに追求された。そして、それと共に、バウンティフルのような名もない小さな町は、無用な存在として淘汰され、姿を消していったのである。

しかし、開発から取り残されたバウンティフルには、豊かな自然が、昔とさほど変わることなく残っていたのである。大地、青い空、可憐に咲く野の花、鳥のさえずり、小川のせせらぎ、そしてメキシコ湾から吹いてくるそよ風や塩の臭いが、疲れ切った人間の神経を休ませ、和ませてくれるのである。ワッツ夫人は、そのことに触れて、作品の中で次のように述べている。

MRS.WATTS. But the river will be here. The fields. The woods. The smell of the Gulf. That's what I always took my strength from, Ludie. Not from houses, not from people. It's so quiet. It's so eternally quiet. And it's given me strength once more, Ludie. To go on and do what I have to do. I've found my dignity and my strength.
(ACT)⁽⁵⁾

⁽⁵⁾ Horton Foote, *The Trip to Bountiful* (Dramatists Play Service, 1954) p.64.

ワッツ夫人が、人間としての力や威厳を回復できたのは、バウンティフルの自然に触れることができたからである。そして、この部分が、作品のクライマックスであり、真骨頂でもある。『バウンティフルへの旅』は、まさに南部のアグレイリアニズムを見事に体现した作品であり、南部演劇の研究者であるチャールズ・ワトソンも、次のように述べている。

The Trip to Bountiful movingly expresses the sentiment of Agrarianism, which links Foote to a temperamental bent widely shared among southerners and perhaps most familiar in the essays and poems of Nashville Agrarians.⁽⁶⁾

グリーンやウィリアムズの作品の中で、部分的にしか見られなかった農本主義的伝統は、フットを筆頭とした新世代の南部の劇作家によって、深まりを見せ、発展・拡大し、「アメリカ南部の戯曲」の大きな伝統の中に合流していったのである。

新世代の南部の劇作家の作品に見られる未来志向的要素

グリーンやヘルマンやウィリアムズの作品に関して指摘できることであるが、アメリカ南部の負の部分、例えば、人種差別、暴力（リンチ・レイプ）、不寛容、搾取、道徳的腐敗・退廃、狂気、無知といった要素を作品の中で色濃く反映している作品が実に多く、大きな特色になっていることである。そして、この特色は、次世代の劇作家の作品の中ではどのようになっていったかを中心に論を進めてゆきたい。

まず第一に言えることとして、新世代の劇作家の作品の中にも、やはり、先述したアメリカ南部の負の遺産を指摘することはできるのである。Beth Henley（ベス・ヘンリー、1952 - ）の『心の恥辱』（*Crimes of the Heart*, 1981）には、それぞれ問題や苦悩を抱えた三人姉妹が登場する。子供が産めない体であるために男性との交際を断念したり、歌手志望でハリウッドまで行ったが夢が果たされることなく自暴自棄な生活を送ったり、虐待に耐えかねて夫に銃を発射し犯罪者となったりと、この三姉妹の置かれた状況は実に悲惨なものである。加えて、母親も過去に飼い猫と共に自殺していることがわかる。エドウィン・ウィルソンが評するように、『心の恥辱』は、“Southern Gothic tradition”⁽⁷⁾の要素が濃厚であることは否定できないのである。

1995年度のピューリッツァー賞を受賞した、フットの『アトランタから来た若者』（*The Young Man from Atlanta*, 1995）には、一人息子の原因不明の自殺からなかなか立ち直れないで苦悩し続ける老夫婦が登場する。

ウィル（Will）は、息子を失った傷を癒すために高価な家を購入するが、その後で、長年人生をかけて働いてきた会社を解雇されてしまう。家の支払いと新会社を起こす資金を工面しようと奔走するが、銀行からも良い反応を得られないし、持病である心臓病も再発し、命さえも危ない。妻リリー・デイル（Lily Dale）は、息子を失ったことが原因で、好

⁽⁶⁾ Watson, *SOUTHERN DRAMA*, p.197

⁽⁷⁾ Edwin Wilson, "Beth Henley: Aiming for the Heart," *Wall Street Journal* (November 6, 1981) in Blake, ed., *Critics' Reviews 1981*, p.138.

きだったピアノの演奏も止め、異常なほど信心深くなってしまふ。息子の思い出のために、夫の反対にもかかわらず、息子の親友だった（実は二人は同性愛の仲であった）、アトランタから来た若者に個人的に会い続ける。生前の息子の話を聞いたり、その若者の不幸な身の上話を無条件に信じ、金銭的な援助までして献身的に尽くす。そのために、夫婦の間に大きな亀裂が生じ、危機的な状況に至ってしまうのである。

こう見てくると、一見、新世代の劇作家の主要な作品と旧世代の劇作家の主要な作品との間には、大きな相違点がないように思えるが、実は、作品の全体的な基調や結末の在り方や方向性に一定の変化が見られると考えることが妥当な場合が多いのである。南北戦争に次いで、アメリカ南部の大きな革命的事件である、黒人による公民権運動を経験した後の、主として1970年代以降の「アメリカ南部の戯曲」には、確かに新しい動向を見て取ることができるのである。チャールズ・ワトソンも、その点に触れて、次のように述べている。

The achievement of racial integration during the explosive 1960s initiated a new era: plays composed thereafter do not focus on segregation and its many ramifications. Southern drama since 1970, taking integration for granted, has turned to new interests, as in the plays of Beth Henley and Romulus Linney.⁽⁸⁾

それでは、一体、その新しい動向とは何か。次に、その点に関して、公民権運動後に発表された作品を幾つか取り上げて、具体的に検証し、実態を明らかにしてゆきたい。

次世代の劇作家の作品では、アメリカ南部における社会的な弱者、女性や老人、黒人やユダヤ人などが、中心的な登場人物として描かれ、問題や苦悩を抱え、大きな困難に直面しながらも互いに助け合い、人生を懸命に生きようと努力し、明るい未来が暗示される。あるいは、対立や摩擦を経験しながらも、相手の立場を理解することで、偏見や誤解を乗り越え、新たな人間関係を築き上げる。

ユーリーの『ドライビング・ミス・デイジー』は、アトランタに長い間暮らしているドイツ系ユダヤ人の金持ちの未亡人デイジーが、公民権運動の激動期を含めた四半世紀に渡る歳月を、不遇な人生を送ってきた黒人の運転手であるホーク（Hoke）と共に過ごすことによって、出自や人種や階級を超えた友情を育み、二人の人間関係を熟成させ、静かに老いを受け入れる話である。最初は、デイジーの黒人に対する偏見や基本的な理解の欠如は相当大きなものであったが、ホークの、長年の誠実な仕事ぶりと公民権運動によっていっそう強固になった黒人としての自覚や自負心に直接触れて、徐々にではあるが、デイジーは人間的に成長してゆくのである。

同じユーリーの『パリフー最後の夜』（*The Last Night of Ballyhoo*, 1997）では、1939年のアトランタを舞台に、ドイツからの移民で、アメリカ南部に根を下ろし、アメリカナイズした、経済的に豊かな（アメリカ）南部のユダヤ人と、ボグロムやゲバルトなどのユダヤ人迫害を逃れて、東欧やロシアから移民してきた、ユダヤ人としての自覚の強い（アメリカ）北部のユダヤ人との間の、ユダヤ人差別に対する意識の違いが問題となっている。

⁽⁸⁾ Watson, *SOUTHERN DRAMA*, p.213.

この作品でも、例え出自や境遇が違って、対話を通じて相互理解を目指す努力の重要性が説かれ、作品の最後では、和解を象徴する、全員でユダヤ教の安息日を過ごすハッピー・エンディングを迎える。

そして、『心の恥辱』や『マグノリアの花たち』そして『アトランタから来た若者』も、幾多の苦難を経た後で、積極的に明るい将来を目指そうとする未来志向的な要素を持つ、次世代のアメリカ南部の劇作家の作品と考えることができる。

『心の恥辱』では、それぞれ不幸に翻弄される三姉妹が、夫に発砲した末の妹ベイブ (Babe) の自殺未遂事件に際して、ベイブの悩みを自分達家族の問題と考え、三人の力を合わせて苦境を打開しようとベイブを励ます。これからの三人の未来は、決して平坦なものではないかもしれないが、一人では弱い存在が、団結することによって励まし合いながら人生を生きてゆこうとする積極的な姿勢が、この作品には見られるのである。フランク・リッチも、その点に関して、次のように論じている。

Crimes of the Heart is finally the story of how its young characters escape the past to seize the future.⁽⁹⁾

『マグノリアの花たち』は、全体の雰囲気としても喜劇的なトーンを強く帯び、それぞれ問題を抱えた南部の女性達が、悲しみに直面してもそれを笑い飛ばすことによって明るく人生を生きてゆこうとする姿勢によく合致している。娘シェルビーを失ったマリーンは、幕切れで、近い将来子供を出産するアネール (Annelle) がシェルビーという名前を使うことを快諾し、人生に関して、次のような前向きな認識に到達し、悲しみを乗り越えようとするのである。

M'LYNN. That's the way it should be. Life goes on. (ACT)⁽¹⁰⁾

『アトランタから来た若者』では、幕切れで、会社を解雇され、息子の自殺から立ち直れないウィルが、もうこれ以上問題を追求しないことによって、心の平安を得ると共に、妻とも和解しようとする。ウィルは、現実直面するよりむしろ問題を曖昧にすることによって、将来を生きようとしているのである。その点で、確かに今までに述べた作品とは違う点が見られるが、過去より未来を大切にしようとする基本姿勢には、未来志向的な要素を指摘することができるのではなからうか。ジェラルド・ウッドは、そのことに関して次のように述べている。

Will Kidder, the self-described realist, in the end chooses uncertainty rather than the truth he admires. Having spent the whole play trying to introduce Lily Dale to realities about ... their son, he finally embraces a peaceful future in which the past

⁽⁹⁾ Frank Rich, "Beth Henley's *Crimes of the Heart*," *New York Times* (November 5, 1981) in Blake, ed., *Critics' Reviews 1981*, p.36.

⁽¹⁰⁾ Robert Harling, *Steel Magnolias* (Dramatists Play Service, 1988) p.70.

remains unclear.⁽¹¹⁾

20世紀において、1960年代より前の時代には、アメリカ南部は、移住して来る者よりも外に出て行く者の数が多く、"seedbed of the nation" と呼ばれる位であった。しかし、1960年代以降になると、この現象が、白人に関して逆転し、1970年代以降は、黒人に関しても逆転したのである。⁽¹²⁾ラルフ・マクギルが言うように、1960年代以降の南部においては、旧世代に属する南部の劇作家の作品の中に見られるような、他の地域と南部を「異なっている」と思わせていた「南部主義」の遺物が、消え始め、⁽¹³⁾それが南部への回帰現象につながったと解釈することができるのである。そして、その動向と連動して、新しい世代の南部の劇作家の作品にも、南部や南部人の捉え方を肯定的・積極的な方向性の下に行っているものが数多く現れ、新しい「アメリカ南部の戯曲」の伝統を形成したと考えることができるのではなかろうか。

(竹島達也)

第4章

「エミリーのバラ」再考 フォークナーの求めたもの

1 .

アメリカ合衆国の偉大な文豪ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) は、故郷のミシシッピ州 (Mississippi) を舞台とする「ヨクナパトーフア・サーガ」 (Yoknapatawpha Saga) と称される連作小説の作者として知られている。

フォークナーは、主として、深南部 (the Deep South) の没落旧家、いわゆる南部貴族の衰退を描いたことで有名である。

彼はむろん長篇小説の作家であるが、衆知の通り、優れた短篇小説も多数物した。その中で最も著名な作品が「エミリーのバラ」 ("A Rose for Emily") であることは論をまたない。日本においても、龍口直太郎氏等の翻訳で、多くの読者に親しまれて来ている。

「エミリーのバラ」は1930年に雑誌『フォーラム』 (Forum) に掲載され (4月)、翌31年に短編集『これら十三篇』 (These Thirteen) に収録されている。例のマルカム・カウリー (Malcolm Cowley, 1898-1989) 編『ポータブル・フォークナー』 (The Portable Faulkner, The Viking Press, New York) の第9刷 (1962年) で、わずか12頁分 (489頁 ~ 501頁) という、文字通りの短編作品である。

⁽¹¹⁾ Gerald C. Wood, *Horton Foote and the Theater of Intimacy*, (Louisiana State University Press, 1999) p.105.

⁽¹²⁾ John Shelton Reed, *My Tears Spoiled My Aim*, (Harcourt Brace, 1993) p.119.

⁽¹³⁾ ラルフ・E・マクギル著、河田君子訳、『南部と南部人 - 変わりゆくアメリカ』、(弘文堂、1963年) p.170.

この短かさで作者の最も広く知られた一作品、多分彼の長短両作品をすべて含めた中で最も広く読まれている一作品足り得ているのには、それなりの理由があると考えねばなるまい。そしてそれには、例えば上記のような短いという手軽さ、取り組みやすさ、一種の絵物語りのような独特のストーリー、殺人事件を含むゴシック・ロマンス世界としての魅力、難解で鳴るこの作家の文章にしてはむしろ読み通しやすいという点、...等々が指摘出来るよう。

が、やはり一番の理由は、この作品に“フォークナー^{ふう}風”が典型的に表れているということではなかろうか。即ち、本作は、ほんの一小篇であるにもかかわらず、フォークナーの広大深遠な文学世界をそのまままるごと逆投影図的に写し出したいわば凝縮版という印象を与えているのである。フォークナーの全的世界の凝集物と言えるということである。

2 .

「エミリーのバラ」は、フォークナーを特徴づけるさまざまな要素を沢山包含している。料理に例えれば、そこはメニューの内容がほとんど出そろっているということである。それに、料理の盛りつけ方、並べ方にも、細部に多少の問題は残すものの、ほぼ成功している。更に、盛りつけ、並べ終えた料理の上に“バラ一輪”をそっと添えて、最終的な仕上げを施しているのである。タイトルの「バラ」は最終の象徴的スパイス、いわば画龍点睛として機能している。それは、構成的にもルーズな面を持つ本作を最終的完結へと導く役割を果たしているように見える。(因みに、フォークナーは、1955年夏、長野市のアメリカ文学セミナーで、質問に答えて、かわいそうなエミリーにバラの一輪も捧げてやりたいではないかという意味のことを言っている。)

フォークナー的諸要素とは、時間(Time)や心理主義(心理描写等)、旧家(南部貴族)の没落、南北戦争、ゴシック色やミステリー性、南部対北部の対比(対立)の構図、父子(娘)関係、独自の語彙や文体、深南部的土着性、黒人(人種)問題、...等々である。

こうした諸要素が作品世界に無理なく取り込まれ、巧みに按配され、融合されさえている。しかも決して総花的に展開されているのではないわけである。

こうして読者は、ごく短時間の内に一気にウィリアム・フォークナーなるノーベル文学賞受賞作家の極めて複雑難解とされる大規模かつ深遠な文学世界を味わうことが可能となるのである。少なくともそうした印象を持たされることは確かである。言い換えれば、本作はこの作家に取り組むための極めて簡便でしかも立派な「マニュアル」にもなり得るということなのである。

3 .

ミス・エミリー・グリアンが死んだとき、わたしたちの町の人間は、みんなこぞって彼女の葬式に参列した。男たちは、いわば倒れた記念碑にたいする敬愛の情みたいなものから、女たちはたいてい、彼女の家の内部を見たいという好奇心から、そこへ出かけていった。彼女の家の内部は、すくなくとも過去十年間、庭師兼料理人の老僕をのぞけば、だれ一人見たものがいなかったのだ。⁽¹⁾

⁽¹⁾『フォークナー短篇集』龍口直太郎訳、新潮社 p.66.

When Miss Emily Grierson died, our whole town went to her funeral: the men through a sort of respectful affection for a fallen monument, the women mostly out of curiosity to see the inside of her house, which no one save an old manservant - a combined gardener and cook - had seen in at least ten years.⁽²⁾

こういう書き出しで始まる「エミリーのバラ」は、ストーリー・テラーとして名を馳せたシャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson, 1876-1941) の教導を受けたフォークナーらしく、語りの口調、ノスタルジックな色調さえ帯びたストーリー・テリングの流儀で書かれているという印象が強い。

物語は全部で5章から成り立っている。それは、冒頭において、ヒロインのオールド・ミス、エミリー・グリアソン (Emily Grierson) の死去 (74才時) のことを述べ、南部貴族出身の彼女の時代遅れに孤立した古い屋敷について記した後、回想形式によって彼女ミス・エミリーの人生を描き出しているのである。父が亡くなった後のミス・エミリーの人生は、古風で気位の高かったその父親の及ぼした影響も加わって、孤独でかたくなな、極めて脱世間的なものであった。長編『アブサロム、アブサロム!』(Absalom, Absalom!, 1936) もミス・ローザ・コールドフィールド (Miss Rosa Coldfield) にも通じてゆく孤絶した人物像なのである。

「エミリーのバラ」中の場面は、フォークナー独特の「現在 過去」の幅広い時間帯の中で、何度も変わるが、その時間的順序はすべてが必ずしも明瞭になるというわけでもない。あいまいなところがある。

ともかく、物語りに即して言えば、ミス・エミリーはミシシッピ州北部のジェファソン (Jefferson) の町に住んでいるわけだが、彼女が町の薬屋に砒素を買いに行った時、「30」を過ぎていた。更に、「40」才頃には、彼女は階下の部屋を使って陶器の絵つけを町の娘たちに教えていた。そして「74」才で亡くなるのである。葬式のあと「我々」は40年間誰も見たことのない2階の部屋をこじあけるが、そこは婚礼の飾りつけがしてあり、ほこりの積もったベットには北部人 (ヤンキー) でミス・エミリーの恋人だったホームー・バロン (Homer Barron) の骸骨が抱擁の形だだと思われる姿で横たわっているのだった。砒素で毒殺されたということだ。

フォークナーは既に『響きと怒り』(The Sound and the Fury, 1929) において、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) 流の「意識の流れ」(Stream of Consciousness) の手法を用いつつ、時間 (Time) の彼独自の処理方法を徹底的に押し進めていた。「エミリーのバラ」が発表されたのは、そうした実験が遂行されたその翌年の1930年の4月のことである。

過去の伝統や規範に束縛されがちな深南部社会を背景とする旧家出身のフォークナーの文学は、彼自身の家門の歴史のこともあって、過去への遡及性に強く特徴づけられている。

フォークナー世界の「現在」は「過去」に深く影響されており、しばしば「過去」の一部分或いはその延長体でさえある。一方、「過去」は「現在」の視点で再構築されることがある。ともかく、彼の「現在」と「過去」は一体であると言うべきであろう。フォーク

⁽²⁾ Cowley, Malcolm, ed. *The Portable Faulkner*, The Viking Press, p.489.

ナー自身、1956年に、次のように述べている。

私が自分の登場人物たちを時間という点でうまく動かし回せたという事実は、少なくとも私自身の見るところでは、時間というものが流動的な状態であって、それは個々人の瞬間的な化身において以外には存在しないものだという私の仮説を証明しております。「あった」というようなものはなく、「ある」のみが存するのです。もし「あった」が存在すれば、悲しみや不幸などあり得ないでしょう。私が創出した世界を宇宙の一種の要石と考えたいのです。その要石は小さいけれど、それが取り去られたら、宇宙そのものが崩壊することでしょう。⁽³⁾

フレデリック・J・ホフマンは、ホークナーにおける時間（Time）を次のように論述している。

フォークナーは人間の諸々の緊張の複合のなかで、しかも修辞、文体、物語の速度とリズムに完全に同化吸収されたものとして、時間を見ているという事実がある。読者が純粋な現在に気づくことはほとんど全くないといってよく（『聖域』は異色の例外であり、他の小説では、ときどき、現在を単独に取扱うことはあってもほんの瞬間にすぎない）、またある特定の過去だけが与えられることもそうしばしばあるわけではない。彼の小説には、重要な、典型的な時間用法が二つある。すなわち、現在にいる、ないしは近時の過去にいた語り手によって、徐々に、段階的に、入念になされる過去の復元（『アプロサム、アプロサム！』の場合のように）、それと、過去 現在 過去ないし過去の各時点内の変化の様式（『響きと怒り』が好例）である。いずれにしても、純粋な、あるいは単独の時間をしての現在は、全くと言っていいほど見られない。現在は過去と融合しており、過去との関連においてのみ意味をなす。そして現在の複雑性の原因もこの二つに時間の融合にあるのだ。

フォークナー的時間は連続体^{コンティニウム}と説明されてよいのであり、時間は過去から現在へ、そして現在から過去へと流動する。現実^{コンティニウム}は客観的存在というよりも、一定の心理状態のなかで、過去と現在が事物ないし事件から作り出すものなのである。⁽⁴⁾

ホフマンはフォークナー的時間を流動する連続体（continuum）として説明しようとしているのである。

4 .

「エミリーのバラ」における時間（Time）の取り扱い方は『響きと怒り』におけるそれのように複雑、厳密ではない。むしろ「回想」物語という枠の中で、比較的自在である。時としてルースネスに通じかねないこの自在さが、むしろこの短篇をして肩の凝らない、

⁽³⁾ William Faulkner: *Three Decades of Criticism*, p.82. (著者訳)

⁽⁴⁾ フレデリック・J・ホフマン『フォークナー論』（伊東正男訳、審美社）pp.15 - 16.

自然で読みやすいものになっている一因ではあろう。“一人称”の「我々(We)」(例えば第1章の1行目、第3章の1行目、第4章の1行目、第5章の21行目など - 『ポータブル・フォークナー』(The Portable Faulkner <The Viking Press> 第9刷 -)を用いた語りの口調が、読者を親しく作品世界にいざない入れ、回想形式のたゆとうような「現在 過去」の時間帯の中でミス・エミリーの極めて南部的かつ悲劇的な人生軌跡を追ってゆらゆらと経巡らせるのである。しかもストーリーの流れはよく分かるわけである。

フォークナーは引き続いて『サンクチュアリー』(Sanctuary, 1931)、『八月の光』(Light in August, 1932)、『アプロサム、アプロサム!』(1936)などへと、重いテーマを抱えた長篇小説の創作業へのめり込んでゆくわけであるが、『響きと怒り』で相当の精力を費やした直後の、そして次の重要な創作段階に入る直前の谷間の時期におけるくつろいだ一服の茶が「エミリーのバラ」だったような気がする。「エミリーのバラ」の筆致にはそうした瞬時のゆとりのようなものが感じられるようである。

5 .

構成的にはエミリーの死で始まり、彼女の死で終る、即ち彼女の死を外枠(物語中の“現在”)として、その時点までの彼女の過去を長年月にわたってあれこれと回想するその過去は、あたかも死の外枠によって封印されてしまうかの如くであり、その封印される諸々をミス・エミリーは沈黙の内に墓中へ持ち込んでいってしまうわけであり、後に残るのは物証としての古い異様な屋敷とホーマー・パロン(恐らくフォークナーにおける南部の旧敵たる極めて北部的なもの)の残骸、そしてミス・エミリーにまつわる浮ついた世間の噂(フォークナー自身もこの噂に悩まされていた)のみなのである。

薬屋で、ミス・エミリーは胸をそらして傲然と言い放つ。

一番効くのを下さい。種類は問いません。

I want the best you have. I don't care what kind.

或いはまた、「日ごとに」「月ごとに」「年ごとに」("Daily, monthly, yearly")時を経たミス・エミリーは、孤絶の内にかたくなであった。

このようにして彼女は世代から次の世代へと過ぎしゆき、その様は懐かしく、逃れようもなく、何もかも受けつけず、静かで、つむじ曲がりのものであった。

Thus she passed from generation to generation dear, inescapable, impervious, tranquil, and perverse.

ジェファソンの墓地(セメタリー)に眠る南軍兵士たちがかつて不屈の旗を揚げたように、ミス・エミリーも孤絶の旗を立て続け、そして、「我々」の知らぬ間に病気になる、それがもとで死去した。

フォークナーが時間の技法的操作の向こうに見ようとしたものは、ミス・エミリーの、南部人の、いや、先祖や家門の絡む深南部人たる彼自身の愛憎半ばする南部的なものの実体だったのであろう。そのことは彼の他の多くの代表的作品が証明していると言えよう。

そしてフォークナーは、その実体が失われてゆくのを一輪のバラでもって追悼しているのである。

(依藤道夫)

結 語

本研究においては、まず第1章では、ドス・パソスが『マンハッタン乗換駅』においていかにキュービズムの影響を受けているかが論じられている。同作においては、ドス・パソスはキュービズムという、客体をありのままに描くのではなく、それをいかにとらえたかを、そのとらえた結果を絵画的な世界を小説に応用しつつ描写するという手法を用いている。そして、バビロンに見立てたニューヨークとそこにうごめくさまざまな人間模様を描出しているのである。第2章では、ノーマン・メイラーの『裸者と死者』において、作者の分身たる主人公のハーン少尉が冷酷な軍隊機構にいかに反発しているかが太平洋戦争を舞台に論じられている。メイラーは、民主主義、自由主義の存在を鋭く問いかけているわけである。

第3章では、テネシー・ウィリアムズ後の南部の劇作家たち、ホートン・フットその他が考察されている。フット等新しい南部の劇作家たちは、未来志向的でより一層肯定的になっており、背景には南部人の意識の変遷が見て取れるという主張である。そして第4章においては、フォークナーの短篇「エミリーのバラ」を再吟味することにより、「時間」の問題等を含めて、彼の深南部を描いた文学世界を改めて総括し直し、その南部認識のありようを考察している。

多面体を成す複雑な現代アメリカ文学のいくつかの重要な局面に光を当て、それらを論じて来たが、全体的な底流として深くかつたく流れる創意に満ちたアメリカ的精神の力強さをまず看取できるように思える。たえず新たな手法に留意しながら、20世紀アメリカ人の独自の精神風土を悲劇的であれ、喜劇的であれ、率直に表明するアメリカ作家の独特の活力を共通して見出す次第である。

(依藤道夫)

参考文献

第1章

飯田善國『ピカソ』岩波書店、2000年。

イヴ＝アラン・ボア『マチスとピカソ』宮下規久朗監訳、関直子・田平麻子訳、日本経済新聞社、2000年。

マリ＝ロール・ベルナダック、ポール・デュ・ブーシェ『ピカソ 天才とその世紀』高階秀爾監修、創元社、1993年。

ピリー・クルーヴァー『ピカソと過ごしたある日の午後』北代美和子訳、白水社、1999年。
Beach, Joseph Warren. *American Fiction 1920-1940*. New York : Russel, 1960.

- Becker, George J. *John Dos Passos*. New York : Ungar, 1974.
- Brantley, John D. *The Fiction of John Dos Passos*. The Hague: Mouton, 1968.
- Brown, John Russell and Harris, Bernard. eds. *The American Novel and the Nineteen Twenties*. London : Arnold, 1971.
- Casey, Janet Galligani. *Dos Passos and the Ideology of the Feminine*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- Cowley, Malcolm. *Exile's Return*. 1951: Harmondsworth: Penguin, 1986.
 . *After the Genteel Tradition: American Writers Since 1910*. New York : Norton, 1937.
- Daix, Pierre. *Picasso*. London: Thames, 1965.
- Davis, Robert Gorham. *John Dos Passos*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1962.
- Dos Passos, John. *Three Soldiers*. 1921: Tokyo: Hon-no Tomosha, 1991.
 . *Manhattan Transfer*. 1925: Tokyo: Hon-no Tomosha, 1991.
- Fry, Edward F. *Cubism*. London: Thames, 1966.
- Gelfant, Blanche Housman. *The American City Novel*. Norman: U of Oklahoma P, 1970.
- Karl, Frederick R. *American Fictions 1940-1980: A Comprehensive History and Critical Evaluation*. New York : Harper, 1987.
- Kazin, Alfred. *On Native Ground: An Interpretation of Modern American Prose Literature*. 1942: New York : Doubleday, 1956.
- Landsberg, Melvin. *Dos Passos' Path to U.S.A.: A Political Biography 1912-1936*. Boulder: The Colorado UP, 1972.
- Lewis, Sinclair. *John Dos Passos' Manhattan Transfer*. New York : Harper, 1926.
- Stein, Gertude. *The Autobiography of Alice B. Toklas*. 1933: New York : Random House, 1993.
- Wrenn, John H. *John Dos Passos*. New York : Twayne, 1961.

第 2 章

- 入江昭 『二十世紀の戦争と平和』東京大学出版会、1986年。
- 川島浩平、小塩和人、島田法子、谷中寿子編 『地図でよむアメリカ』雄山閣出版、1999年。
- 佐渡谷重信 『ノーマン・メイラーの世界』評論社、1975年。
- 田中啓史訳 『ノーマン・メイラー研究』荒地出版、1980年。
- Dearborn, Mary V. *MAILER A Biography* Houghton Mifflin Company, 1999 .
- 日本アメリカ文学文化研究所編 『アメリカ文化ガイド』荒地出版社、2000年。
- 日本マラマッド協会編 『ユダヤ系アメリカ短篇の時空』北星堂書店、1997年。
- Mailer, Norman *Advertisements for Myself* Harvard University Press, 1992 .
The Naked and the Dead Flamingo Modern Classic, 1999 .
- 山西英一訳 『ノーマン・メイラー全集 裸者と死者』新潮社、1969年。
 『ノーマン・メイラー全集 ぼく自身のための広告』新潮社、1969年。
 『世界文学大系99 メイラー アメリカの夢』河出書房新社、1980年。
- Radford, Jean *NORMAN MAILER A Critical Study* The Macmillan Press, 1975 .
- Rollyson, Carl *The Lives of Norman Mailer* Paragon House, 1991 .

第3章

Blake, Joan (Ed.). *New York Theatre Critics' Reviews 1981*. Critics' Theatre Reviews, Inc, 1981.

New York Theatre Critics' Reviews 1987. Critics' Theatre Reviews, Inc, 1987.

Foote, Horton. *The Trip to Bountiful*. Dramatists Play Service, 1954.

The Young Man from Atlanta. *American Theatre* (September, 1995). Theatre Communications Group, 1995.

Harling, Robert. *Steel Magnolias*. Dramatists Play Service, 1988.

Henley, Beth. *Crimes of the Heart*. *Best American Plays: Eighth Series*. Ed. Clive Barnes. Crown, 1983.

ラルフ・E・マクギル『南部と南部人 変わりゆくアメリカ』河田君子訳、弘文堂、1963年。

Reed, John Shelton. *My Tears Spoiled My Aim*. Harcourt Brace, 1993.

Uhry, Alfred. *Driving Miss Daisy*. *Best American Plays: Ninth Series*. Ed. Clive Barnes. Crown, 1993.

The Last Night of Ballyhoo. Theatre Communications Group, 1997.

Watson, Charles S. *The History of SOUTHERN DRAMA*. The University Press of Kentucky, 1997.

Wood, Gerald C. *Horton Foote and the Theater of Intimacy*. Louisiana State University Press, 1999.

第4章

Blotner, Joseph, *Faulkner A Biography*, Volume 1, 2, Chatto & Windus, London, 1977.

Cowley, Malcolm, ed. *The Portable Faulkner*, Ninth Printing, The Viking Press, New York, 1962.

Hoffman, Frederick J., and Vickery, Olga W., ed. *William Faulkner, Three Decades of Criticism*, A Harbinger Book, Harcourt, Brace & World, Inc., New York and Burlingame, 1963.

フレデリック・J・ホフマン『フォークナー論』(伊藤正男訳) 審美社。東京。昭和62年。

龍口直太郎訳『フォークナー短篇集』新潮社。東京。平成4年。

依藤道夫『フォークナーの世界 そのルーツ』成美堂。東京。1996年。